

吉田城址 発掘調査現地説明会資料

令和5年11月5日(日) 主催：豊橋市文化財センター

時間 10:00～12:00、13:30～15:30

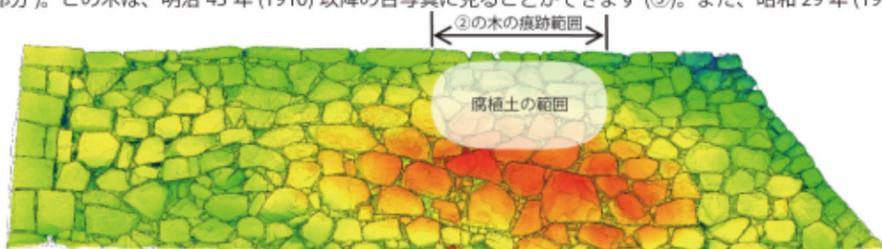
南多門とは？

南多門は、本丸南側のL字状に築かれた多門櫓の下に埋門が設けられた構造で、門扉を挟み西側と東側は石垣の上に建てられました。今回調査をした東側の石垣は江戸時代前期に築かれたと考えられ、東西幅約6.5m、南北長約18.7m、高さ約4.5mになります。この石垣は孕みといった崩落の危険がありました。そのため、解体修理を行っています。これに伴いオリジナルの構造が失われます。そのため、オリジナルの構造を記録し、崩落の危険が高まった原因を探りました。



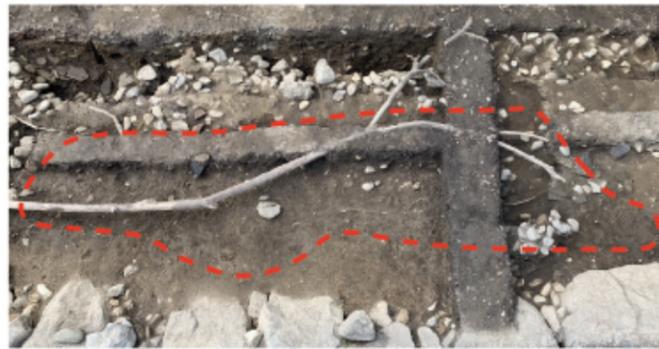
ポイント1 孕みの原因は？

石垣の西面中央付近では、大きな孕みが確認されていました(①の赤い部分)。その上方から木の痕と考えられる腐食土を確認しました(②)。腐食土は、地上から高さ約4.3m～約2.5mで確認できます(①の白い部分)。この木は、明治43年(1910)以降の古写真に見ることができます(③)。また、昭和29年(1954)の「豊橋産業文化大博覧会」に際して、当時の本丸地表面が削られたことで、当初埋まっていた根石や、その直上の石材が露出し、石材の前傾や前方への押し出しといった影響が見られます(④)。

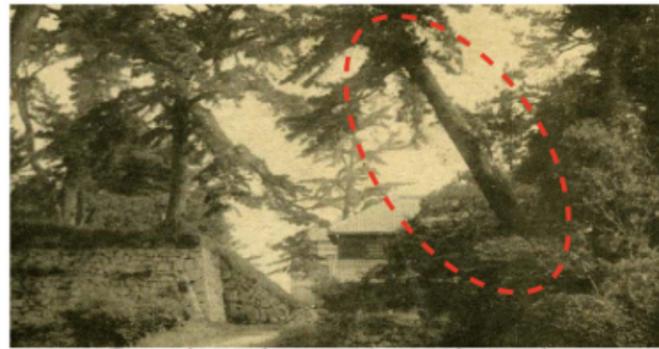


さらに、石垣の北側と西側から、近代の土管が出土しました(⑤)。これは、陸軍歩兵第十八聯隊が吉田城址に設置された以降に、設けられたものと考えられます。土管を設置するために、根石を置く整地層が掘りこまれていましたが、これは石垣に影響していないようです。

① 石垣西面のオルソ画像
(赤い部分が最も孕みが大きな箇所)



② 木の痕跡(点線部分)



③ 古写真(明治43年以降)



④ 根石とズれる直上の石材



⑤ 石垣西側から出土した土管

ポイント2 石垣内部の構造が明らかに！

石垣内部の土塁は、何層も土砂を盛って、築かれたことがわかりました。特に、中央下方付近では、**オレンジ色の土砂**が、盛られていました(①)。この盛土の北端では、**焼土層**が確認されました(②)。この焼土層は、根石の下にもぐり、石垣の西側まで続いていることがわかりました(③)。この焼土層は、**鉄櫓台**の南東隅や南側でも確認されており、鉄櫓台が築かれる以前の池田照政期頃のものと考えられています。そのため、**オレンジ色の盛土**は当時の土塁の可能性がります。

中央上方から南側下方にかけて、**栗石層**が確認されました(④)。しかし、現在の**築石**に伴うものではないため、この部分の石垣は、南側へ拡張された可能性があります。水野氏(1632～1645に城主)の「沢瀉紋」の軒丸瓦(⑤)がこの栗石層から確認されているため、**小笠原氏**(1645～1697に城主)の頃に、この**栗石**と石垣が築かれたと考えられます。

また、本丸では初めてとなる下層遺構確認のため、現在の地表面から1.9m(標高約9.4m)まで掘り、**須恵器**が伴う層と**基盤層**を検出しました(⑥)。このことから、南多門周辺では江戸時代までに、約2mの盛土が行われていることがわかりました。



① オレンジ色の盛土



② オレンジ色の盛土北端の焼土層



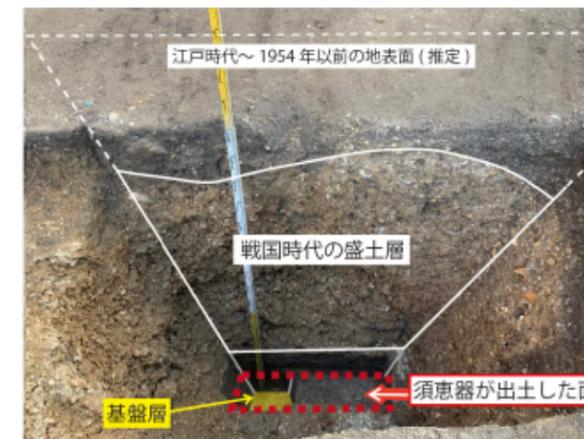
③ 石垣の西側へ続く焼土層(上から)



④ 土塁内部の栗石層



⑤ 栗石層から出土した家紋瓦



⑥ 本丸の盛土の深さ

ポイント3

石垣に彫られた《刻印》^{こくいん}

今回の発掘調査では、新発見の刻印10石14個を含む、15石22個の刻印が確認されました。刻印とは、石垣に用いる石材を採石地から切り出し、運搬し、実際に積んでいく各過程で彫られた図柄や文字のことで、石垣普請に関わった大名・藩主や家臣、工人など多くの人々が用いました。今回の調査で、南多門台石垣は、城内で最も多くの刻印が確認されたこととなります。また確認された刻印のうち、《山田》《二》の2点は、吉田城址では始めて確認された図柄です。

今回の発見を含め、吉田城址では61個の石材に51種類79個の刻印が確認されています。これら刻印が施された理由については、刻印が様々な場面で用いられるため、一つ一つの背景を読み解くことは容易ではありません。ただし吉田城址においては、天下普請である名古屋城と同一の刻印が確認されており、名古屋城の採石地として用いられた場所に残された石材の一部が、後に流用された可能性が指摘されています。

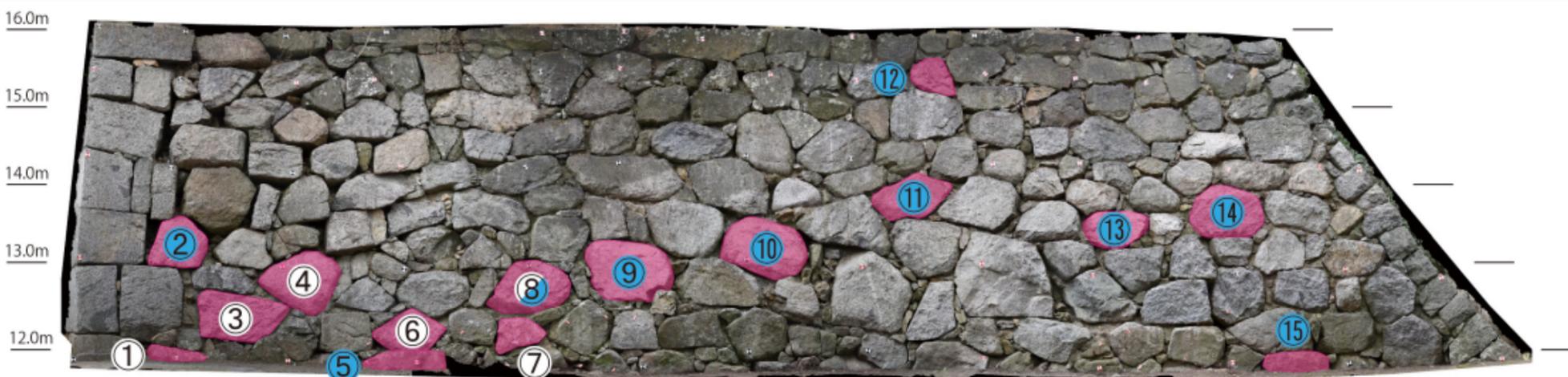
吉田城址で刻印が施される石材は花崗岩類に限られます。また、大型の石材を大量に運び込むには海路の利用が想定され、実際に三河湾の沿岸部や島々には刻印や矢穴が残る石材が確認されています。よって、吉田城で確認されている刻印と採石地に残る刻印との比較から、右図のように広い範囲から花崗岩類が集められたと推定することができます。



石垣刻印から推定される、吉田城址の花崗岩類の採石地

刻印から推定される花崗岩類の採石地

三河湾と豊川の水運を利用することで、効率よく大量の石材を移動させることができました。



刻印が発見された位置

朱塗りが刻印の彫られた石材。各番号は個別の写真番号に対応します。写真の無い⑧は表裏両面に《トサ》、⑬は《井桁》の刻印です。番号が青塗りの刻印は、今回の調査で新たに確認されたものです。また写真の刻印は、見易くするためチョークで色を付けています。

土佐藩主・山内忠義に由来する刻印

《トサ》刻印は、吉田城で最も多く見られる刻印で、山内忠義の官位である、『土佐守』に由来すると考えられます。《トサ》は単独で記されるもののほか、他の文字や記号と組み合わせられるものもあります。このうち、《百々》刻印は、山内家の家臣で江戸城などの普請にも関わった築城の名手、百々綱家や、婿養子である百々忠安との関わりが考えられます。



広島藩主・福島正則に由来する刻印

吉田城址では、福島正則に関係すると考えられる刻印が比較的多く確認されています。今回確認された刻印では《井桁》が3点と目立ちますが、同じ刻印が西浦海岸（蒲都市）で確認されています。《井桁》《□に大》いずれの刻印も南多門やその周辺に集中する傾向があり、石垣を築く過程で、特定の採石場から集約的に運び込まれた石材を用いた可能性があります。



徳島藩主・蜂須賀至鎮に由来する刻印

《山田》は家臣である山田宗重もしくは子の山田宗登と考えられます。《田》の彫り込みには海洋生物の巣（棲管）が付着しており、蜂須賀家の採石場が沿岸部にあったことや、

刻印が彫られてからしばらくの間、現地に石材が残され、その後、吉田城に搬入されたことが分かります。

なお同様の刻印は、名古屋城の天守礎石や小天守、本丸大手馬出沿いの堀などで確認されています。



参考：名古屋城天守台礎石の刻印《山田》

長州藩主・毛利秀就に由来する刻印

《二》の由来は、毛利家が長門国と周防国（いずれも山口県）の二か国を領有したことに由来するとも言われますが、定かではありません。しかしながら、同様の刻印は名古屋城の石垣のうち、毛利家が普請を担当した西の丸の南堀で大量に確認できることから、同家に由来する可能性が高いと言えます。また同様の刻印は三河湾の沖島（西尾市幡豆町）でも確認されています。



参考：名古屋城で確認された《二》刻印



参考：毛利家が普請した名古屋城の石垣（着色した石材に《二》刻印が施される）

その他の刻印

丸や四角形、三角形などの比較的単調な図柄の刻印は、単独では性格が判明しないことが多くあります。



丸一文字